

私の授業実践

教育現場の最前線から

語学／教養講義科目担当 教員としての取り組み

山尾 涼

● 広島修道大学人文学部助教

ドイツ文学を専門としている私は、主に1年生を対象とする初修外国語（ドイツ語）と上級言語科目（ドイツ語）、および教養科目に類する大講義室での講義を担当している。初修外国語は20〜35名程度の受講者に、アルファベツ

トからドイツ語を教えるというクラスである。講義科目は上限300名を対象に、「ドイツ文学」や「文化論」、「西洋文化史」、「西洋文化論」などがあり、内容も指定のタイトルとおりに区別しななければならない。以下、語学担当教員としての取り組みと、教養講義科目担当教員としての課題や工夫、悩みなどを2項目に分けて記述してみよう。

1 語学担当教員として

講義科目を担当して初めて気が付いたことは、外国語の小規模クラスと、200名程度の大規模クラスでは、授業を効果的に牽引するために必要なスキルが異なるということである。外国語科目は、学生の前で発音や会話

などの模範を示し、学生間の発話練習を促すなど、とにかく体や口を使って外国語のリズムと実践的な会話を教え込むことが重要である。パートナー練習などの場面によっては、あまりにも厳粛な雰囲気はかえって学習を阻害する原因になりかねない。学習目標を明確に提示してクラスを強く牽引できると同時に、明るくオープンな教員像が求められる。実演してみせて、繰り返し口頭で練習させて、体に覚えさせるといった点では体育などの実技科目に近いように感じる。

また、同時に語学教員には、教室内の秩序を目的に促して即座にコントロールする能力が必要とされる。グループ／ペア練習の際に学生が消極的すぎるようではコミュニケーションが成り立たない。いったんアクティブにさせる必要があるが、その状態からクールダウンさせて、文法的な説明事項への集中に切り替えるには、学生との間にある程度の信頼関係が構築されていなければ難しい。さらに、少人数で行う授業であるから、学生各人のやる

気や勉強密度がありありと把握できる。したがって、ドイツ語運用能力の低さの原因が本人のモチベーションにあるならば、いかにして向上させることが可能か、学生の性格から対策を考えなければならぬ。

以上のような外国語教員の課題、すなわちオープンな教員像、教室内秩序を構築するための信頼関係の構築、学習のフォローを達成する目的で、2017年度から「自己反省カルテ」を毎回提出してもらうことにした。授業ごとの学生の「集中力／理解度／コミュニケーション力／文法」を学生自身に1〜5にレベル分けしてもらい、3行程度の気づき（感想ではなく、自分の課題や目標達成度などを書く）を記入してもらったためのシートであり、授業後に集めて、次回に短いながらもコメントを記して学生に返却するというものである。

「自己反省カルテ」を導入した際は、自ら始めた試みであるものの、本当に学生が気づきを記入してくれるのか、また、教員からのコメントを喜んで読むのか懐疑的であった。しかし実践してみると、意外にも学生は素直に気づきを記入してくれた。こちらは回答しなければならぬが、とにかく否定的な言葉は書かずに、前向きなモチベーションを褒めたり、発想の良さを指摘したりするな

ど、肯定的なコメントに終始することにした。私にとっでは意外であったが、学生のやる気は、「教員がどれほど学生のことを気にかけているか」に大きく左右されているとの印象を受けた。また教室内のムードも明らかに良くなり、授業中に質問しづらいくとも文面ならばカルテに記入することができるので、授業進度も学生に合わせ調整することができるようになった。明らかに語学の勉強に興味のなさそうな学生も、カルテを通して具体的な勉強方法のコツを教えたり、少しずつ上達していることを言葉で伝えたりすることにより、学習への取り組みがかなり改善できた。

2 教養講義科目担当教員として

本学にはドイツ文学科がないので、全学部・学科を対象とする教養講義科目として「ドイツ文学」や「西洋文化論」などの講義を大講義室で行っている。前任者から受け継いで、はじめて「ドイツ文学」を行った時は、収容人数上限の300名が集まった。それほどにも学生はドイツ文学に興味があるのかとはじめは心を打たれたが、実のところ、単位がとりやすい科目だとかねて有名だったらしく、単位目当ての者が大多数を占めていた。失望

したものの、同時になるほど腑に落ちた。

誤解を払拭するために、まずはいわゆる代返を取り締まる出席システムを実行した。講義冒頭、講義後の出席確認、および毎回課題としているワークシートの提出によつて、三重に出席を管理することにした。携帯電話も厳しく禁じ、注意事項を明示したプリントを配付して、とにかく教室内秩序を守ることに気を配った。大人数であつても気を付けていれば携帯電話もある程度取り締まれるもので、口頭で注意をしているうちに、受講の姿勢は改善され、また安易な単位修得を目的とする学生は受講をとりやめるようになった。

ドイツ文学を理解するには、作品の執筆された時代背景や文化的な知識、宗教や哲学、芸術に関する予備知識が前提として必要であるが、学生はドイツがどこに位置しているのか、ドイツ語が話されているのはオーストリアなのかオーストラリアなのか、キリスト教とはいかなる宗教なのか、ほぼ理解していないと了解した。教員にとつて自明であることが、学生には自明ではなく、知らないからこそ彼らは高い学費を払って学びに来ているのであり、こちらはそれをどうやって分かりやすく教授できるかに集中すべきだと考えた。

これらの点に気を付けて講義を行っていると、私も基本的なことはあまり知らなかったことに気が付いた。西洋の地理的区分や時代ごとに発展、変化する思想や文化の連関など、教えることに私の基礎的な知識も向上し、自らの好奇心にとつても講義科目は良い刺激になると実感した。また、私が講義の準備を通して楽しみながら学んだことは、「学ぶ楽しみ」という漠然とした教員の主観が自然に学生へと伝わっているような印象を感じることもある。

講義科目は大教室で行うため、座席は指定しており、前の2列は前方で受講したい学生のために空けている。そもそも前列には誰も座らないだろうと予想していたのだが、意外にも前列は希望者で埋まっている。あえて挑発的な試みをする、学生もやる気を試されていることを感じるのか、自発的に行動するように見受けられる。講義はパワーポイントのみで行っており、スライドは配布せず、必ずノートを取るように促す（1カ月ごとにとめて学内ネットワークにアップするため、後日参照は可能）。

講義の最後の15分間は、その日に学んだことの概略や、キーワードの意味を説明せよといった記述式の課題を課

すため、学生は講義中真剣にノートを取るようになった。課題を記入したワークシートは講義後に提出してもらい、優れた考察を毎回6、7名程度、学籍番号でスライドに提示し、良かった点を具体的に紹介するようにした。良い文章の書き方をこのように具体例を挙げつつ指導することによって、学生の論理的思考力や文章力は回ごとに向上していくのを実感した。語学科目の自己反省カルテと同じで、学生は教員に自分のコメントがしっかり読まれていること、また自分が手本としてスライドに示されることが嬉しいらしく、学期末アンケートでもこの方法は好評だった。

いまのところ学生は課題を嫌がることなく、教室内ルールにも素直に従ってくれている。最後に私が本当に驚くのは、200人の講義でも、質問をすれば手を挙げて自発的に回答してくれる学生が必ずいることであり、さらにはそれがごく少数ではないということだ。講義の冒頭に、「前回の講義の内容を誰かまとめて話してください」というと、学生は手を挙げて、私よりもうまく話をしてくれる者もいる。もちろん講義中の積極性は、成績評価の対象にはしているものの、学生時代の私を鑑みると彼らに頭が下がる思いがする。講義科目で用いるスライド

やテキストは毎年作り直しているため準備に骨が折れるが、学生の素直さや前向きさから教わることも多々ある。

教員として働く中で、よく失念するのは、学生がまだ20歳前後であるということだ。受講モラルや自律的学習意欲の低さを嘆くより、どのような行動がモラルに則っているのか、そもそもモラルとは何か、そして自律的とはいかなる心性を指すのか、一つ一つを言葉で教え、同時に、彼ら自身も言葉や行為で他者に意思を伝える必要があることを伝えると、学生は納得して行動してくれる。ドイツ文学の知識は社会に出た時に即必要となるものではないが、論理的な思考力や他者への説得力、場面分析力は人生を通じて必要なものであり、それは解釈のトレーニングの積み重ねによって磨くことができるものである。講義を受講することによって、どのような能力を向上させることができるか、またそれを大学以降の人生において、いかに活用可能であるかを学生に明示することを心がけている。

生活者の視点を重視し健康を科学する — 看護学教育の新たな試み

浅野 美知恵 ● 東邦大学健康科学部長

1 健康科学部が千葉県に開設するまで

本学の起源は、医師である額田豊と晉の兄弟が、女子の医学・薬学・理学という理科学教育の向上と健全な人間性の育成を目標に、1925年に東京都大田区大森の地に帝国女子医学専門学校を創設したことに始まる。1950年に東邦大学と改称し、「自然・生命・人間」を建学の精神として大森キャンパス（東京都大田区）、および習志野キャンパス（千葉県船橋市）の二つのキャンパスを有する男女共学の自然科学系総合大学に発展した。2017年には健康科学部が加わり、医学部・薬学部・理学部・看護学部と合わせて5学部、大学院4研究科（医学研究科、薬学研究科、理学研究科、看護学研究科）となった。

本学の看護教育の歴史は、帝国女子医学専門学校創立の翌年に開設した帝国女子医学専門学校付属看護婦養成所に遡る。以降、組織変更の後、2011年に看護学部看護学科を開設した。

既に看護学部看護学科を有する本学が二つ目の看護学科を千葉県に開設した主な理由は、社会の健康問題の変化に対応するとともに、千葉県では、主に都市部への人材流出により、深刻な看護職員不足が続いているという地域の要請に対応するためである。



習志野キャンパス健康科学部棟（赤枠部分）



健康科学部棟

こうした状況から本学は、社会の要請に応え得る専門的知識と技術を有し、リーダーシップを発揮できる看護職養成に貢献することを目指して、千葉県の佐倉看護専門学校を発展させる形で新たな学部を開設した。健康科学部に属する看護学科は、薬学部・理学部のある習志野キャンパスに本拠を置き、健康科学という自然科学系の学問分野であることもあって、科学的思考など科学力の育成を重視することとなった。

2 健康科学部看護学科が育成する人間像

健康科学部では、健康科学とは「人間が健康で幸せな生活を営むことを支援するために、自然および環境と人間との調和を図り、より善い人間の適応や福祉を具現化することを、人間の尊厳を基盤にして科学的に追求し実践する学問」と定義している。健康科学部看護学科は、この健康科学の視座に立脚し、豊かな倫理性を備え多様な社会のニーズに応じた看護を提供する科学的思考力・看護実

践力・自己教育力・豊かな人間力を備えた専門家の育成を目的とし、さらに地域医療などの社会貢献に取り組む人材を育成する。

本学科の育成する人間像、すなわちディプロマポリシー（学位授与の方針）は次のとおりである。

(1) 看護学の専門知識と技術を修得している。
(2) 他者を尊重し多様な価値を認め、対象となる人々の健康の回復・維持・増進を支援する実践力を修得している。

(3) 看護専門職としてメンバーシップおよびリーダーシップを発揮し、チームの中で有機的に活動する資質を身に付けている。

(4) 看護職の社会的責任を理解し、実践家としての倫理観を感受する力と熟考する力、それらに基づく判断を行動に表す力を身に付けている。

(5) 自然科学を看護活動の根拠とし、実践に生かす探究心と、自ら学ぼうとする好奇心を身に付けている。これらの能力を身に付け、かつ所定の単位を修めた者に対し、学士（看護学）の学位を授与する。さらに、看護師国家試験受験資格、保健師国家試験受験資格（選抜20名以内）が取得できる。

この人材育成を達成するためのアドミッションポリシー（入学者受け入れ方針）は、次のとおりである。

(1) 看護学を学ぶことに対し、目的意識と好奇心、探究心を持っている人。

(2) 基礎学力を備え、主体的に学習課題に取り組む人。

(3) 人間の生活（暮らしむき）に興味関心を持っている人。

(4) 他者を尊重し、自分の考えを述べることができ
る人。

(5) 人間の健康を守ることに貢献する意欲のある人。

3 カリキュラムの特色

東邦大学の看護教育の伝統を継承し、人間が健康で幸せな生活を営むことを支援するための地域医療推進型のカリキュラムを編成している。主な特色は、人間の健康について科学的に分析する知識や技術を身に付け、看護学の専門分野を4領域編成によって、人間の暮らしを重視し日本の医療構造の変化に対応できる実践者を育てる教育、さらに、学生が人間として、また社会人・職業人として豊かな人間性と高い倫理観を醸成することを目指している。臨地実習では、東邦大学

付属3病院および千葉県を中心とする保健・医療・福祉・介護など各施設との協力により、連携体制を整備している。

本学科のカリキュラムポリシー（教育課程の編成・実施の方針）は、次のとおりである。

(1) 倫理観の涵養・看護実践には、その基盤に看護哲学と高い倫理観が求められる。そのために、建学の精神を基盤とした看護哲学教育・看護倫理教育を行う。

(2) 異文化理解の促進

(3) 看護実践者の育成…4年次秋学期に看護実践能力を評価する。

(4) 看護専門職としてのケア志向の育成

(5) チームワークおよびリーダーシップの育成

(6) 自己教育力の育成

(7) 科学的思考の育成

このようなカリキュラムポリシーに則って、バランスのとれた科目配置となっている。教養教育科目を1年次春学期に配置し、同時に専門科目の授業履修を可能として、4年間における履修科目の配置が特定の学年において偏りのないように配慮している。教養教育科目は専門科目の基礎となるために、32科目中21科目



演習室の授業風景

を選択科目としている。専門基礎教育科目については、専門科目を履修する上で必要な基礎的知識を学修する。1年次から「人間と健康（16科目開講）」に関する医学・薬学・健康科学の知識を学び、3年次からは「社会と健康（7科目開講）」を考えるための保健・福祉・行政の知識を学修できるように配置していて、次のような特色がある。

一つ目は、人々の暮らしを重視する看護学の領域編成による専門教育である。生活に根差した地域医療推進型の教育を重視するために、生活者に視点を置いた「個人の健康 (Individual health)」、「家族の健康 (Family health)」、「コミュニティの健康 (Community health)」という側面から人間の健康を捉える。それらをつないで、多様化し複雑化している健康問題を紐解いて健康支援につなげていく。このような実践力を身に付けるために、専門教育科目である看護学の専門分野を4領域編成にしている。

① トランスレーショナル看護領域では、人間の生活の中でも個人に焦点を当て、個人の健康を支援するための看護実践力と、看護学のエビデンスの追求に必要とされる知識・技術・態度の基礎的な能力を身に付ける。そのために基礎看護学と成人看護学を統合して学修する。

② ファミリーヘルス看護領域では、家族に焦点を当て、家族構成員一人一人の発達段階やライフサイクル、精神の健康が家族の健康に影響を及ぼす要因と捉え、家族の健康生活を支援する看護実践に必要とされる知識・技術・態度の基本的な能力を身に付ける。そのために、小児看護学、母性看護学、精神看護学を統合して学修する。

③ コミュニティヘルス看護領域では、コミュニティに焦点を当て、地域の健康やそれを支える仕組みを支援する能力を身に付けるために、老年看護学、在宅看護論、公衆衛生看護学を統合して学修する。

④ プレ・プロフェッショナル看護領域は、それまでに学んできた教科目を統合する領域であり、大学教育を卒業後の看護専門職（看護師・保健師）へとつなぐ科目構成とする。

二つ目は、リーダーシップ力育成のための科目を設定していることである。リーダーシップ力・関係形成の能力を修得できる授業科目として、「千葉県の地域医療」「心理学」「教育学」「組織論」「コミュニケーション論」「プレゼンテーション論」「看護管理論」などを系統的に配置している。さらに、演習や臨床実習の授業では、関係形成、チームワーク、役割などについての考察やリフレクションを繰り返す教育方法を1年次から適宜・一貫して取り入れて、リーダーシップに必要な考える力や判断力、表現力などを修得できるように工夫している。

三つ目は、社会の変化と地域を見据えた実習教育を実施していることである。地域で生活する高齢者を理解し、地域における健康支援を学ぶ臨床実習「看護入門実習Ⅰ」を1年次秋学期に、高齢者を対象とする臨床実習「老年看護学実習」を2年次秋学期に配置し、高齢者理解を先行して学ぶ。さらに、3年次秋学期には保健師養成のための実習1単位分を、臨床実習「コミュニケーションヘルス看護実習」として、全員が地域の健康支援を学修することも大きな特色である。

四つ目は、高校教育から本学部の教育課程につながる

自由科目を設定していることである。本学の新学部教育課程の履修に当たり、健康科学という専門分野への導入を助け、学習効果を高めるために自由科目5科目を置く。具体的には、人間性豊かな社会人および専門家としての倫理観の涵養の導入に当たる「倫理はじめ」、自然科学分野への導入としての「生物学入門」「化学入門」、社会のニーズに対応する看護実践者の育成へとつながる「千葉県の地域医療」、大学生に求めるリテラシーとしての「文章表現法」である。これらは、入学して間もない時期に履修できるように配置している。

五つ目は、前述の教育を推進するために、教員組織を3領域（トランスレーショナル看護領域、ファミリーヘルス看護領域、コミュニケーションヘルス看護領域）編成としていくことである。

4 トランスレーショナル教育の採用

本学部ではトランスレーショナルという概念を中心に据え、科学的思考の定着を図る教育、すなわちトランスレーショナル教育を行っている。

トランスレーショナルとは、基礎から臨床への橋渡

「(Bench to Bedside)」の意であるが、本学部においては知識・技術の移転という意味で用いる。ここでいう知識・技術は、リテラシー（読み書きの能力、表現されたものを理解・分析し活用する能力、応用力）と、論理思考・批判的思考（クリティカル・シンキング）の能力の発揮を包含する。看護学におけるトランスレーショナルは、関連する知識や技術の移転が、基礎看護から臨床看護へ、看護学の専門領域内で他学問から看護学へ行われる。トランスレーショナル教育は、授業や実習などで積極的、意図的、反復的に行われることを特色とする。

1年次春学期は、「自然科学概論」「健康科学概論」「トランスレーショナルへの挑戦」などの科目によって看護援助（ケア）の根拠となり得る自然科学系学問分野の知識との結び付きを学び、各看護分野における理論と実践を統合させる。例えば、「トランスレーショナルへの挑戦」では、身の回りから採取した菌の観察や身体計測の実験で得たデータを、健康な生活の場面や看護と関連付けてレポートにまとめ、知識の移転が体験できるしかけになっている。その後、理論や研究成果を根拠として活用する方法やエビデンスの蓄積方法

に關する体験学習を積み重ねることにより、科学的思考や発想力を養い、根拠に基づいて看護を実践する力を付けていく。

5 将来への展望

人々の健康支援は、地域包括ケアの時代に移行している。地域に焦点が当たれば当たるほど、生活者としての個人や家族にも焦点を当てることになるという捉え方が重要といえよう。これからの健康支援は、多職種連携協働がますます強化されていくであろう。

本学部は、地域の人々との交流を通して職種間連携を図り、地域の予防活動や健康の維持・増進活動などにも学部としての役割を発揮していくことになるだろう。また、学内の連携を強化し、学外の保健・医療・福祉施設および他大学との連携も強化しながら、健康を科学する新たな看護学の教育・研究拠点としての発展を目指すことになるであろう。

本学部の学生には、自ら学び、看護学を通じて自身の人生を豊かにしながら、健康や生命、人間を探究し、看護学を創造し、リーダーシップを発揮できる看護職者に成長することを期待している。

わが 大学史の 一場面

日本の近代化と
大学の歴史

チャレンジ&エレガンス —— 梅花女子大学、この10年

はじめに

梅花女子大学の茨木ガーデンキャンパスは、大阪府北部に広がる小高い丘にある。キャンパスは緑に包まれ、梅や桜など四季折々の花が香りと彩りを添えている。2017年度は、この緑豊かな美しいキャンパスに、学部と大学院を合わせて558名の新入生を迎えた。この新入生全てが有意義な学生生活を送り、チャレンジ精神溢れるエレガントな女性として成長し、卒業後は社会に貢献することがわれわれ教職員の願いである。

2008年4月、私は大学および短期大学部の学長に就任した。当時、本学は文系に偏った学部構成であった。少子化の影響もあり、大学、短期大学部とも学生確保が厳しい状況であった。私は、就任後の最初の全学教授会

で、本学はこれまで、原点である建学の精神に立ち返るとともに、時代の要請に応え、新しい大学像を模索すべきであると訴えた。以来、この10年は、建学の理念に基づくスローガン「チャレンジ&エレガンス」に向かつての改革の時であった。

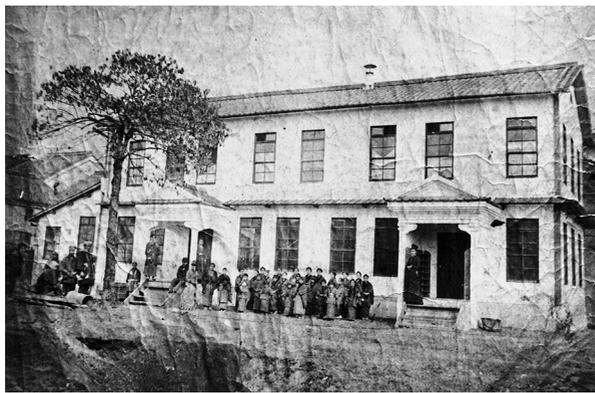


茨木ガーデンキャンパス

長澤 修一 ● 梅花女子大学学長

1 梅花女子大学の源流

本学の歴史は、1878（明治11）年の梅花女学校設立まで遡る。梅花女学校の創立者・澤山保羅は、留学先の米国イリノイ州のエバンストン第一組合教会でキリスト教の洗礼を受け、日本における福音伝道に身を捧げる決意を抱いて、1876年に帰国した。



創設期の土佐堀校舎（明治12年頃）

その翌年の1

月、日本最初の自給教会である浪花公会（現 浪花教会）を創設してその牧師となり、続いて教育事業として、自給独立の女学校設立の準備に入った。

女学校設立は、浪花公会および姉妹教会であった梅本町公会（現大阪

教会）から選出された委員によって進められ、校名は梅本町公会と浪花公会からそれぞれ一字を取って「梅花女学校」とし、翌年の1月7日に開校式が行われた。生徒は15名であった。

澤山と同郷で6年後輩にあたる成瀬仁蔵（後に日本女子大学を設立）が両教会を代表して祝辞を述べ、「愛なる女学校」の設立を宣言する。「愛」とはもちろん神の愛に支えられる愛、神の愛に触発された人を愛する愛である。つまり、神の愛を証する女性の育成が「愛なる女学校」設立の趣旨であった。また、後に第5代校長に就任する成瀬は、その頃の女学校の教育方法について「当時既に大に自発自学的で、而して全く生徒本位であった」と述べている。小学校の教員時代から知識の詰め込み教育に疑念を抱いていた成瀬は、その教育方法とは異なる教育、すなわち生徒が主体的に学ぶ教育を導入していた。このように、明治時代初期設立の梅花女学校は、キリスト教の愛の精神に基づく人格形成と、その独自の教育方法を通して、当時の女性の自主性や主体性を育み、調和的な知的能力の発展を目指していた。言い換えると、このキリスト教系の「愛」なる女学校は、教養が高く、自立した女性の育成を目指すという、明治初期にあっては新し

い教育上の挑戦であった。

この挑戦は、1922年の梅花女子専門学校の設立、さらには1964年の梅花女子大学開設へと続く。梅花女学校設立の趣旨は、澤山が愛していた聖句「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」(マタイによる福音書7章12節)をスクール Mottoとして掲げ、すべての梅花人の心に脈々と引き継がれている。

2 大学改革、この10年間

2008年にスタートした一連の改革の基本方針は、大学の基盤である「キリスト教主義」「歴史と伝統」「女子大学」「小規模大学」および「茨木ガーデンキャンパス」を最大限に生かすことにあった。特に、「女子のみを対象とすること」「財政規模が小さい大学であること」は弱みと捉えられがちであるが、逆にそれを強みとして、本学の特色とすることを心掛けたのである。

(1) 学部学科の新設

まず、学部学科の改革である。大学全体の専門分野を考慮しながら、卒業後、女性が社会で自立しやすい学部

学科の新設を進めた。

2010年度は看護師・保健師の養成を目指す「看護学部看護学科」、幼稚園教諭や保育士への道を開く「心理こども学部こども学科」。2012年度、食のスペシャリストを養成する「食文化学部食文化学科」。2015年度、歯科衛生士の養成を目指す「看護保健学部口腔保健学科」。2017年度は管理栄養士を目指す「食文化学部管理栄養学科」の新設である。

いずれも、多くの女性が活躍している分野であり、その資格取得が可能な学部学科である。この結果、現在では、既存の文化表現学部情報メディア学科、国際英語学科、日本文化創造学科および心理こども学部心理学科と併せて4学部9学科となった。

これによって学生確保が優位になったのはもちろんのこと、学部入学定員がわずか495名にもかかわらず、多種多様な研究分野の教員が本学に加わったことにより、専門教育のみならず、大学全体で専任教員中心の幅広い教養教育を展開することが可能になったのである。

もちろん、優秀な教員の採用は教育に関わるものだけではない。学部学科の新設の結果、教員の研究分野は多岐にわたり、本学の研究機関としての活性化にもつながっ

た。その成果は研究助成金の申請件数、外部資金の獲得件数、研究成果の特許権申請などに如実に現れている。

(2) チャレンジ力、エレガンス力

チャレンジ力とは、新しいことなどに組みむ力や問題発見・問題解決力を意味している。その向上には、幅広い教養と専門力に加えて、主体性や思考力、根気よくやりぬく姿勢などが求められる。共通教育科目に「問題発見・解決セミナー」を設けたのは、そういった基礎となる力を養うためである。

また、双方向対話型授業や演習を中心とするグループ型授業、フィールドワークや実習、海外研修などの体験型授業は、まさに学生の実践力を養い、チャレンジ力を磨くにふさわしい教育方法として強化している。このアクティブ・ラーニングの広がり的魅力的な授業の実践を意図して、2年前から教員相互の授業参観(年2回)や授業実践報告会(月1回)を実施している。

なお、本学は、教育の一環として産学連携の強化を図っている。企業との連携を通して、学生の専門知識や女性としての感性を生かし、新しい「モノ」を生み出す。この産学連携は学生の貴重な社会経験の場でもあり、学生

の感性や向学心を引き出し、実践能力を磨く良い機会でもある。現在、26のプロジェクトが進行中である。

女子学生にとって、エレガンス力を身に付けることは重要であり、本学はさまざまな取り組みを行った。共通教育科目の「マナーや美しい日本語の話し方・書き方に関する科目」「芸術・身体表現としてのバレエやミュージカルに関する科目」の導入などである。

マナーについては、2013年度に「梅花マナーブック」を作成し、1年次の必修科目「初年次セミナー」で梅花マナーの周知を図り、その実践を推奨している。マナーは、思いやる心の実践であり、そのマナーを身に付けることは、エレガントな女性になるための第一歩でもある。

(3) 教学の責任体制

2015年度に、学部教授会から学長を議長とする全学教授会に変更して正式な教授会とした。教授会メンバー全員が学生一人一人の教育に責任を持つ体制である。つまり、専任教員は、所属する学部学科の専門教育に責任を持つとともに、他学部他学科の教養教育の責任も担うのである。小規模ながら多種多様な学科を擁する大学だ

からこそ可能な教育体制である。

また現在、専門・教養教育とも、さらに専任教員中心の授業とするため、大幅にカリキュラム改革を行っているところである。

(4) 梅花歌劇団「劇団この花」

2016年に梅花歌劇団「劇団この花」がスタートした。劇団員はそれぞれの学部学科に所属しながら、日々熱心に劇団活動を行っている。幸いにも、舞台芸術監督に著名な謝珠栄先生を迎えることができた。そのおかげで、各公演は「学生の演技とは思えない、素晴らしい公演であった」と好評を得ている。

「大学における学問の力」と「舞台におけ



梅花歌劇団「劇団この花」

る表現力」を併せ持つ「文舞両立」を成す学生が社会で活躍することを願っている。

(5) 費用対効果

新学部の設置をはじめ、新しいことにチャレンジするには、当然、財政支出が伴う。小規模な大学であるだけに、費用対効果の低い人件費や諸経費は徹底的に整理しなければならない。

この観点から、2014年には生涯学習センターを廃止し、短期大学の募集を停止した。その他、事務職員の数削減など、費用対効果を高める取り組みは今後も続く。

3 建学の精神の具現化に向けて

この10年間、主として学部学科の改組・新設を中心に改革を進めてきた。そこで目指したのは、少子化や大学間競争に影響されない独自の大学創りであり、そのため、創立以来の建学の精神を具現化することが重要であると考えた。

現在、学部の入学定員はわずか495名。専任教員1人当たりの学生数は13・5名。ようやく、創立時の教育

方針である「学生一人一人を大切に、専任教員中心の教育体制」が整った。

しかし、改革に終わりは無い。本学にとって本当の戦いはこれからである。全教職員による、学生一人一人の自主性を大切にする真のオーダーメイド教育への第一歩をいま、踏み出したばかりなのである。

おわりに

この10年間の取り組みを紹介したが、改革の根底に常にあったのは、澤山の人生・信念と「梅花」という校名に込められたメッセージであった。

古くは万葉の時代から日本人に愛されてきた「梅」は、外界がまだ寒い時期に花を咲かせ春の訪れを知らせることから、「百花の魁」の別称をもつ。また、「気品」の象徴であるとか「徳の木」と紹介されることもある。それはまさに、明治維新という改革のときに自身の生命を神に捧げ、福音伝道による日本教化への献身を決断し実践した澤山の人生・信念に通じるメッセージである。

明治維新の時代と同様に先行き不透明な現代。一人一人の顔や個性が見える教育や心の教育を通して、学生が生涯にわたって「チャレンジ&エレガンス」が内面から

にじみ出る「梅花人」となり、社会の中のそれぞれのステージで活躍してくれること。それこそがわれわれ教員最高の喜びである。

